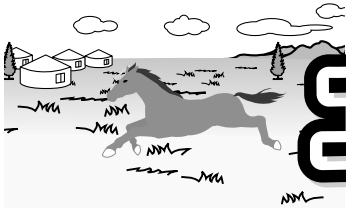


# 「ユニセフ子ども物語」

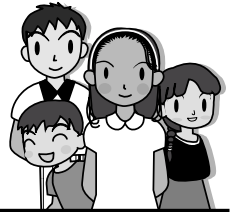
地球に生きる子どもの暮らし

Mongolia

# モンゴル国



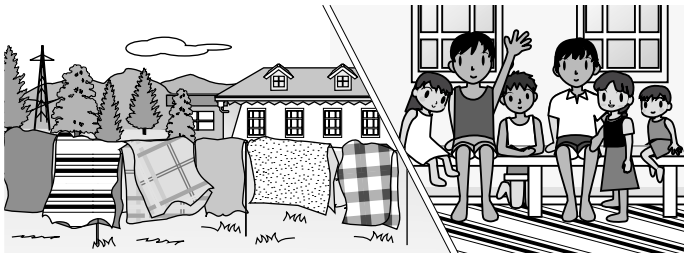
## エンサイハンの夢



青い青い、あまりにも青い空に白い白い雲が浮き出してみえます。なにもまざらないまっさらな空気の中を強い太陽の光がつきぬけてゆきます。ひんやりと丘をわたっていく風は、この夏が長くはつづかないことを告げています。モンゴルの夏はとても短いのです。

モンゴルの首都、ウランバートルの郊外。低いさくの上に並んでぼされているふとんが色あせています。ここは、子どもたちの身元確認センター。ウランバートルのまち中で帰る家もなくくらしていた子どもたちが保護されてここへやってきます。

エンサイハンがこのセンターにつれてこられたのは5日前。毎日きちんと食事ができ、ふとんの上で眠れる生活は1ヶ月ぶりです。「ここで一番気に入っているのはピアノがあることだよ」9月の新学期がはじまれば6年生になるはずのエンサイハンは13歳、ここでは年長組です。ときおりけんかをはじめる年下の子どもたちをなだめたり、すっかりお兄さんらしくふるまっています。



エンサイハンはおかあさんの妹にあたるおばさんと一緒にくらしていました。おかあさんは1年前に再婚し、相手の男の人と地方へ行ってしまったからです。おばさんはエンサイハンを好いてはくれませんでした。エンサイハンはひどい目にあわされたあげく、とうとう家を追い出されてしまいました。ひとり頼る人もいなくなったエンサイハンは、夏休みがはじまった6月のころ、まちに出てなかまたちとくらすようになりました。そして、川辺で寝ていたところを保護されたのです。

エンサイハンは小さかったころのことをときどき思い出しています。仕事から帰ったお父さんの太い腕にぶらさがって遊んだこと、おかあさんが料理するようすをながめていたこと。そんなことを思うとき、胸の奥のほうから何だかあついものが込み上げてくるようで、仕方ありません。

エンサイハンのおとうさんが仕事をなくしたのは、たしかエンサイハンが小学校にあがったころのことでした。社会が混乱して、たくさんの人が仕事をなくしたときでした。次の仕事が見つからず、おとうさんは毎日お酒に酔って、しまいにはおかあさんをな

ぐるようになりました。たまりかねたおかあさんはエンサイハンをつれて家を出たのです。でも、そのおかあさんも今はどこにいるのかさえわかりません。

〇〇〇〇〇

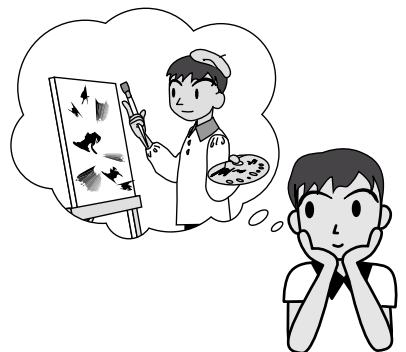
このセンターにエンサイハンがいられる時間はあと1、2週間です。その間に家に帰されるか、子どものための施設におくられるかが決められます。エンサイハンは、センターにもいたくないし、おばさんの家にも決して帰りたくはありません。でもこのまま街でくらししていれば、そう遠くないうちに冬がやってきます。マイナス30度以下になるモンゴルの冬を外で過ごすのは並たいていではありません。子どもたちはひどいにおいのするマンホールの中で、お湯の通っているパイプのそばに身をよせあって寒さをしのぐのです。そんなふうにくらしていくことを考えると、エンサイハンはつらくなります。学校にだって行けないのしょうから。



この5日の間に、エンサイハンはセンターの先生に今までのことを全部聞いてもらいました。先生は「心配するな」と言ってくれます。「きみにとって一番よいことをきっと考えるから」と。

エンサイハンは、おばさんの家に帰らなくてすむといいなあ、と思います。家に帰ったらまた追い出されてしまうかもしれません。できることならエンサイハンのことをよく知っているともだちの家でいっしょにくらしたいのですが、それは難しいようです。

もし、子どものための施設でくらすようになったら、学校には行けます。エンサイハンの夢は画家になること。学校に行きつづければなれるかもしれません。そして、いつかおかあさんをさがしていっしょにくらしたい…。そんなふう願うエンサイハンのまわりにはおなじような瞳をした子どもたちが集まっています。





ユニセフ支援の現場 COMMUNITY-BASED ACTION FOR THE PREVENTION OF STREET CHILDREN AND NEGLECTED CHILDREN IN MONGOLIA

モンゴル

ストリートチルドレンの保護と予防



1990年、経済的に深いつながりのあったソ連の崩壊とともにモンゴルは市場経済へと移行し、これがもたらしたさまざまな混乱は子どもたちを直撃しました。家畜が私有化されると、家畜を増やすために労働力が必要となり、子どもたちは学校を途中でやめるようになりました。失業者の急増により貧困家庭が増え、ストリートチルドレンを生む背景となりました。

この7月、日本ユニセフ協会ではモンゴルへのスタディツアーを実施し、ストリートチルドレンとなった子どもたちに出会い、彼らへの支援事業を視察しました。

ストリートチルドレンの保護

地域の社会福祉担当の人が街なかでくらす子どもたちひとりひとりの状況を把握し、警察とも協力してストリートチルドレンを保護します。保護された子どもたちは身元確認センターと呼ばれる警察が運営するセンターに収容されます。そこで、家庭環境や教育を受けた度合いについての調査や健康診断などが行われたのち、住所が確定した子どもはできる限り、家庭に戻し、そのほかの子どもは孤児院などの施設が受け入れます。この半年間でこのセンターにはのべ1227人の子どもが収容されましたが、うち1029人は以前も保護された経験のある子どもでした。



ウランバートル、バヤンズール地区の市場の周辺にもストリートチルドレンの子どもたちが生活しています。ジュースを売ったり、ごみの中から食べ物をあさったりして生活しています。



身元確認センターの子どもたち

予防措置の必要性

ユニセフは国立子どもセンターやNGOの間でさまざまな協力関係を築きながら活動をすすめています。国とNGOの間での調整を図り、子どもの問題に対して共通の問題認識が得られるように活動しているのです。

ユニセフは国立子どもセンターが運営するシェルターを支援するほか、ストリートチルドレンを出さないための予防措置として貧困家庭への支援も行っています。たとえば、貧困家庭に学用品、かばん、服などを提供するプロジェクトの対象地域では中途退学した子どもの50%が学校に戻ることができました。

また、予防のためには地方の子どもたちの学習環境を改善することが重要です。ユニセフは、暖房など学校の施設を修復し、子どもたちの学習環境を整えるための支援を行っています。

移動しながら生活する遊牧民の子どもたちのためには「移動教室」があります。遊牧民の移動についてくるこの教室で、子どもたちは家畜の世話の合間に読み書き計算を学びます。これは「学校外教育」ですが、ここで学んだ後、正規の学校に戻る子どももいます。家畜の私有化後、忙しくなった家の手伝いのために学校から遠ざかりかけていた子どもたちを、こうした柔軟な教育のあり方が支えています。近年ようやく再び正規の学校に通わせる親が増え、「移動教室」に通う子どもは多少減ってきているそうです。



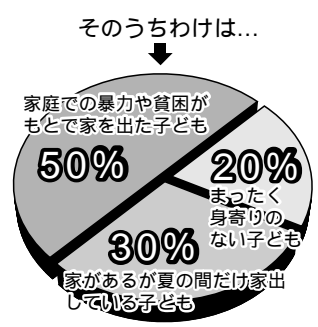
「移動教室」の内部。

ストリートチルドレンの現状

モンゴルの国立子どもセンターが調べた統計によると都会の街なかでくらす子どもたちは約4000人。

モンゴルの失業率は実質20%を超えており、あまり改善されていません。貧困ライン以下の暮らしをしている人

びとは約36%にもほると推定されています。そのため、ストリートチルドレンが今後さらに増えることが懸念されています。



マンホールの中：冬の間に子どもたちはこうした中で暖をとって生活しています。ひどいにおいとおびただしいごみに、そこに立つのが精一杯でした。

シェルター

国立子どもセンターやNGOがストリートチルドレンのためのシェルター（保護施設）を運営しており、こうした施設で生活するようになる子どもたちもいます。多くは共同生活の形態をとり、近隣の学校と協力して、子どもたちが適切な教育を受けられるようにしています。学校に長い間行けなかった子どもは、自分の年齢に相応する学年の学習にはついていけないので、補習授業や学校外教育で補うなどのシステムが必要とされています。



子どもたちがサマーキャンプにいる間、市内の施設では建物の修理作業が行われます。



たくましく馬をのりこなし、家畜の世話を切り盛りする草原の子どもたち



気候のよい夏の間、子どもたちは郊外のサマーキャンプで生活します。モンゴル子どもの権利センター（NGO）が運営するサマーキャンプにはウランバートル市内5つの施設から、3歳～17歳までの84人の子どもたちが集まっています。子どもたちは畑で野菜を育て、基本的な生活の作業を担っておこなっています。



キャンプ内には学校や幼稚園なども設けられ、学校外教育が行われます。自然の素材を利用してつくった作品を見せてくれました。

モンゴル指定募金のお知らせ

日本ユニセフ協会では、学校募金のひとつとして、モンゴルのストリートチルドレンの支援事業を指定して募金することができます。ご協力をお願いいたします。

写真©日本ユニセフ協会